教育現場における生徒―教師間の信頼関係の性質

佐竹　圭介

The Nature of Trust Between Students and Teachers in Educational Settings

SATAKE Keisuke
（Received October 21, 2024）

キーワード：信頼関係、教育、生徒、教師

はじめに

本稿の目的は、教育現場における生徒と教師の信頼関係についての先行研究に関する知見をまとめることにより、この概念の性質について検討するものである。

教育現場における生徒と教師の間で生じる人間関係は、独自の関係の質を持っており（岸田，1987）、特に公的な関係でありながら、人間的接触が基盤となって教育的・感化的側面を色濃く持つなどの性質は、他に類を見ない関係の質であると言えよう。そのような関係を表す一視点として、生徒と教師との間に生じる信頼関係は、教科教育、教育相談など教育現場におけるあらゆる場面において重要な要因であることは論を俟たない。

しかしながら、この信頼関係は日常的にも学術的にも多義的に用いられる、混乱を招きやすい概念である。検討を始めるに当たって、まず、信頼関係およびその関連概念について整理し、次に本稿で論考の対象とする概念について定義をする。

まず、信頼関係という語の構成要素である「信頼」に着目する。学術的研究においては、信頼 trust と信頼性 trustworthiness は区別され（山岸，1998）、前者が個人の対人的な感情を示す一方で、後者は個人や組織が持つ性格や特性を示す語として用いられる。これを教育現場に適用して考えると、前者は生徒から教師に向けられる感情や態度として用いられるが、後者は主に教師が生徒（あるいは保護者等）に対して示す行動や特性として用いられることが一般的であろう。ただし、これは一方向ではなくとも、その逆の方向、つまり教師から生徒に向けられる信頼、生徒の教師に対して示される信頼性、という状況も想定される。この信頼もしくは信頼性の双方向性については、後に検討する。

また、信頼という語が示す現象については、さまざまな立場からその構成要素について検討されている。山岸（1998）は、社会心理学的視点から信頼の多義性について整理し、信頼には①相手の能力に対する期待としての信頼、と②相手の意図に対する期待としての信頼、の２種類があることを示しているが、これは「何によって信頼するか」という信頼生起の要因の視点からの分類である。本稿で扱う生徒と教師の信頼関係における信頼にはどちらも含まれるものと言えよう。この点についても、後に先行研究を踏まえ、検討する。

さらに、中井（2012）は社会的学習理論の観点から、信頼を①他者一般に対する信頼、と②特定の他者に対する信頼に分けて論じているが、これは「信頼を向けるものは何か」という信頼の対象の視点からの分類と言えよう。このうち、前者の他者一般に対する信頼はErikson(1959/1973)の言う基本的信頼感basic trustや天貝（1995）の信頼感尺度で測定されるような個人の特性としての信頼感を示すが、本稿で扱う生徒と教師の信頼関係における信頼は、後者の特定の他者に対する信頼のことであると言えるだろう。

それでは次に、この「信頼」に感情を示す語を加えた「信頼感」について整理するために、以下に先行研究における信頼感の定義をいくつか述べる。まず、天貝（1995）は、信頼感を「自分あるいは他人（他の対象）に対して抱く信頼できる気持ち」と広い定義を採用しているが、先述の通り、他者一般に対する信頼を想定しており、特定の他者に対する信頼については、おそらく概念的にも分化されていないまま論じられて

いると考えられる。なぜなら、尺度項目の作成作業に用いた既存の尺度の中に、他者一般に対するものだけではなく、特定の他者に対するもの（パートナーへの信頼感尺度）もどちらも含まれているためである。

次に、佐竹（2003）は、教師に対する生徒の信頼感について検討しており、この研究における信頼感は他者一般に対する信頼ではなく、特定の他者に対する信頼として「相手を信頼し、頼ることができる気持ち」と定義されている。ここでは信頼感を感情として定義し、生徒から教師に限らず、教師から生徒への感情も含んでいる。

同じく生徒による教師に対する信頼感について体系的に研究を行っている中井（2012）は「生徒の教師に対する信頼感尺度：Students' Trust in Teachers:（STT 尺度）」を作成しており、この尺度における信頼感の定義は「教師を信じ、頼ること。教師との関係に対する自信と安心感。教師としての資質や能力への役割期待を含む。肯定的側面と否定的側面を有し、個人の発達や経験によって変化する。また、教師の能動的な働きかけを必要する」とされている。ここでは信頼感は、行動であり感情であるものとして定義されており、生徒から教師に対するものに限定をしている。さらには、先述の山岸（1998）が言うところの相手の能力に対する期待も含んでいるところが特徴である。

以上の信頼感に関する研究から、信頼感の概念についてまとめると、まず対象に関して言うと、他者一般に対する信頼を示す語として用いられることも特定の他者に対する信頼を示す語として用いられることもどちらもあり、次にその方向性に関しても、双方向的なものも一方向的なものもあり、さらにその内容についても、感情だけではなく、行動や能力への期待までも含む幅広いものとして研究されていると言え、その多義性は著しいことが見て取れる。

最後に、本研究のテーマとして示している信頼関係という語についてであるが、日常でもよく用いられ、学術的な領域において扱われる場合でも、明確な定義がなされない語である。ただし、教育現場における生徒と教師の信頼関係に焦点づけた場合は、中井（2012）の定義、つまり「『生徒の教師に対する信頼感』をもとに構築される、生徒が教師を信じて頼る関係」を援用し、上記で整理した信頼感を生徒と教師がお互いに持ち、あるいは向け合っている状態を示すものと言って良いだろう。つまり、対象に関して言うと特定の他者に対する信頼であり、方向性は双方向的なものであり、内容は感情、行動、役割期待などを含むものと言え、さらには先述した山岸（1998）の信頼生起要因の分類のどちらも、つまり能力への期待と意図への期待のどちらも含むものとし、以降の検討を進めることとしたい。

１．生徒と教師の信頼関係に関する先行研究

ここからは、生徒と教師の信頼関係に関する先行研究について概観する。まず、教師が生徒との信頼関係を構築するために、生徒の信頼感を生起させる教師の行動、すなわち教師の信頼性 trustworthiness の要因についての研究について、主要な研究を列記する。

１－１　教師の行動に関する先行研究

生徒と教師の信頼関係については、これまで思弁的な論考が多く、その重要性への意識の高さに比して学術的な研究は十分ではないことが指摘されている（中井，2012）。また、学術的研究においても、どのような指導が生徒との信頼関係の構築に有用であるか、という教師側の要因に着目した研究が多くなされてきた。

緒方・鈴木（1997）は、４年制大学生・短期大学生 470 名を対象に、過去の小中学生時の担任と児童・生徒の信頼関係上、印象深い学級を想起してもらい、教師の指導性と生徒―教師間の信頼関係との関連を検討し、その結果、教師の専制・支配的指導性がその学級の生徒―教師間の信頼関係と負の相関を示すことを明らかにしている。

廣澤（2002）は、小学生 390 名を対象とした担任教師を信頼する理由に関わる質問紙調査を実施し、信頼できる担任教師の特徴として「児童中心」「心理的距離が近いこと」「公正公平」「学習指導・援助」「態度の一貫性」「親近感」という５つの因子を見出し、学年間の因子間相関の分析の結果、学年の上昇につれて「児童中心」因子が重視され、高学年の児童では、担任教師を批判的に見ながらも親しみを感じたいという傾向があることが示された。

佐竹（2003）は、高校生と大学生 215 名を対象とした、信頼感を生起させる教師の行動に関する質問紙調査を実施し、分析の結果、生徒の教師に対する信頼感を生起させる教師の行動として「尊重」「肯定的特質」

「安定性」「受容性」「明朗性」「親密性」の６つの因子が見出された。

中井（2012）は、中学生 374 名を対象とした前述の STT 尺度と「教師の勢力資源尺度」との関連を検討し、その結果、勢力資源尺度の「親近性」「正当性」「参照性」が生徒の教師に対する信頼感を高め、「罰」を強く認知することが生徒の教師に対する信頼感を低減し、「不信」を高めることが明らかとなった。加えて、勢力資源尺度の「罰」と「正当性」は生徒の教師に対する信頼感の下位尺度（安心感、不信、役割期待）に一貫して影響を及ぼすことも示された。

中井（2012）は、上記の質問紙調査とともに同じ調査協力者中学生 374 名に対し、STT 尺度と「教師のリーダーシップ行動測定尺度」についても調査を実施しており、分析の結果、メンバーの関係維持に焦点づけた「M 行動」が安心感、役割期待に正の影響、不信に負の影響を与えることが示された。また、メンバーの目標達成に焦点づけた「P 行動」は、不信、役割期待に正の影響を及ぼすことを明らかにした。さらに P 行動も M 行動も高水準のリーダーシップ行動を示す「PM 型」と M 行動を優先する「pM 型」の教師は、P 行動を優先する「Pm 型」とどちらも低水準の「pm 型」の教師に比べ、生徒の安心感、役割期待が高く、不信が低いことも示された。

さらに中井（2012）は、中学生 201 名を対象とし、過去・現在の教師との対人関係において、教師を信頼できる、あるいは信頼できないと感じた出来事について自由記述を求める調査を実施し、その内容を質的に分類した。その結果、信頼できた理由として「受容・安心」「教師の資質」「その他」のカテゴリを抽出した。さらに、信頼できなかった理由として「非信頼性」「非受容性」「その他」のカテゴリを抽出した。

羽賀・三浦（2023）は、４年制大学生 235 名を対象とし、信頼できる教師の特徴に関する質問紙調査を実施し、分析の結果「責任的確」「寄り添い」「資質適切」「理解寛容」「自己中心」「無責任」の６因子を見出した。

Hiatt, Lawman, Maloni & Swaim（2023）は、組織における信頼の規定要因を示した ABI モデル（Mayer & Schoorman, 1995）を大学教育の学生と教員の関係に適用し、その影響を検討した。ABI モデルは、信頼を受ける個人の特性として、能力 Ability、他者への配慮 Benevolence、誠実性 Integrity を実証的に示したモデルである。Hiatt et al.（2023）は、調査協力者に対して自身の指導教員に対する信頼を尋ね、ABI モデルの３つの要因が学生の教員に対する信頼感を説明することを示した。

以上に挙げた先行研究の結果は、表１のようにまとめられる。

表１　生徒の信頼感を生起させるための教師の行動に関する先行研究

文献	調査対象	結果の概要
緒方・鈴木（1997）	4 年制大学生・短期大学生	教師の専制・支配的行動が信頼関係と負の相関
廣澤（2002）	小学生	児童中心、心理的距離が近いこと、公正公平、学習指導･援助態度の一貫性、親近感
佐竹（2003）	高校生・4 年制大学生	尊重、肯定的特質、安定性、受容性、明朗性、親密性
中井（2012）	中学生	勢力資源尺度の親近性、正当性、参照性が信頼感を高め、罰は信頼感を低減し不信を高める、勢力資源尺度の罰と正当性は信頼感に一貫して影響を及ぼす
中井（2012）	中学生	「P 行動」は、不信、役割期待に正の影響を及ぼす、「PM 型」「pM 型」は、「Pm 型」「pm 型」の教師に比べ、生徒の安心感、役割期待が高く、不信が低い
中井（2012）	中学生	信頼できた理由として「受容・安心」「教師の資質」「その他」、信頼できなかった理由として「非信頼性」「非受容性」「その他」
羽賀・三浦（2023）	4 年制大学生	責任的確、寄り添い、資質適切、理解寛容、自己中心、無責任
Hiatt et al.（2023）	4 年制大学生と大学院生	能力、他者への配慮、誠実性

これらの結果を概観すると、生徒の信頼感を生起させるための教師の行動は、①児童生徒に対する受容と尊重、②教師としての能力、③正当性、④親密性が重要であると言えよう。この結果は、中井（2012）が示した生徒の教師に対する信頼感の構成概念（安心感、生徒に対する尊重、行動の正当性、専門性への期待）とほぼ一致するが、両者で異なる概念である親近性と安心感が近接した概念であることが推測できる。

１－２　生徒の教師に対する信頼感に関する先行研究

次に生徒が教師に対して抱く信頼感、すなわち生徒の教師への信頼 trust の要因に関する先行研究について概観する。

本テーマについては、中井（2012）が体系的に研究を行っており、まずその研究結果について概観する。中井（2012）は、これまで生徒と教師の信頼関係に関する研究は思弁的なものが多く、実証的な研究があったとしても、教科指導における教師の行動など、教師側の要因（信頼性）に関する研究に偏っていたことを指摘する。佐竹（2003）も同様の指摘をしており、両研究とも生徒が教師に向ける信頼感という視点で生徒と教師の信頼関係について実証的に検討することを提案している。ただし、この視点に基づいて中井（2012）が行った一連の研究が扱うテーマは多岐にわたる。本稿の目的が、教育現場における生徒と教師の信頼関係の性質について検討する、というものであるため、生徒の教師に対する信頼感がどのような要因によって規定されているのか、という研究結果に絞って挙げると、①教師の信頼性、②環境的要因、③個人の心理的要因、にまとめられる。以下にそれぞれについて概説する。

まず、①教師の信頼性については、先述の生徒の信頼感を生起させるための教師の行動の先行研究としても挙げたように、教師の勢力資源、教師のリーダーシップ行動、教師の指導態度、教師の指導行動が、信頼できる教師イメージ、すなわち教師の信頼性 trustworthiness を醸成し、そのことが生徒の教師に対する信頼感に影響を与えるとされている。次に、②環境的要因に関しては、中井・庄司（2006）も引用しながら、家庭環境、周囲の情報、地域環境、学校特性が生徒を取り巻く環境的要因を構成し、それが生徒の教師に対する信頼感に影響を与えるとされている。最後に、③個人の心理的要因については、両親への愛着、教師との対人経験、過去の対人経験、教師スキーマが、個人の心理的要因を形づくり、それが生徒の教師に対する信頼感に影響を与えるとされている。

これらの研究で得られた知見を中井（2019）は再構成し、子どもの教師に対する信頼感の包括的仮説モデルを提唱している。このモデルでは子どもの教師に対する信頼感は「子どもの要因」「個々の教師の要因」「環境要因」の３つの要因の相互作用によって形成されていくプロセスが示されており、多面的に心理教育的アセスメントを行うことを強調している。

続いて、佐竹（2003）の研究について概説する。先にも示したように、この研究では、生徒が信頼感を得ることができるような教師の行動について質問項目を構成し、信頼感を生起させるための教師行動として６つの因子を抽出している。その上で、中井（2012）と同様、生徒側の体験から信頼関係について検討し、生徒に教師に対する信頼感が生起するときには、以下のような体験が生じていることを示した。すなわち、①被尊重感、②好感、③安心感、④被受容感、の４つである。この結果を踏まえ、どのように指導、かかわりをしたら良いのか、という教師の行動に焦点づけるより、生徒のどのような体験をさせることを目指すか、という生徒の体験に焦点づけた視点が提案されている。

村上・坂口・櫻井（2012）は、中井・庄司（2006）や佐竹（2003）の研究を踏まえ、小学生の担任教師に対する信頼感尺度を作成し、信頼感を一次元で捉えている。

児玉・川本（2015）は、信頼感に関して、教師を信頼した際の心理的状態と教師の行動に関する児童の認知が混同されているという指摘のもと、前者を測定する教師に対する信頼感尺度を構成し、この尺度「好意・安心感」と「素直・幸福感」という２因子構造であることが示されている。ただし、小中学生に対してこの尺度を用いて検討した森（2016）は、分析の結果、１因子構造であることを示している。

これらの結果を概観すると、生徒の教師に対する信頼感に関する研究は、中井（2012）が指摘するように、十分実施されていないこともあり、統一した知見としてまとまっていない現状がある。これは、先述したように、信頼感には著しい多義性があることと関連していると考えられ、信頼感の研究においては、他者一般に対するものなのか特定の他者に対するものなのかという「定義」の水準、焦点づけるのは信頼をする側なのかされる側なのかという「行為者」の水準、行動なのか態度なのか体験なのかなどの「対象」の水準などを明示した上で進めることが求められると言えよう。

２．これからの生徒と教師の信頼関係に関する研究のために

ここまでは、生徒と教師の信頼関係に関する先行研究のうち、教師の行動と生徒の信頼感という２つの視点における研究について概観してきた。以降は、今後の生徒と教師の信頼関係の研究に資すると思われるトピックを先行研究からいくつか挙げ、建設的な研究の視点の材料を提示することを試みる。

２－１　教育現場における生徒―教師間の信頼の構造

山岸（1998）は、社会学の立場から信頼の概念について整理をしている。そこでは、研究のための操作的定義として、信頼を相手の意図に対する期待の一部であるとしている。ここで言う信頼は他者一般に対する信頼であると言えよう。一方、本稿のテーマである生徒と教師の信頼関係における信頼の概念は、特定の他者に対する信頼のことであるため、山岸（1998）の信頼の概念整理はそのまま援用できないが、そこに付け加えるかたちで生徒と教師の信頼関係における信頼の概念を整理してみたものが、図１である。

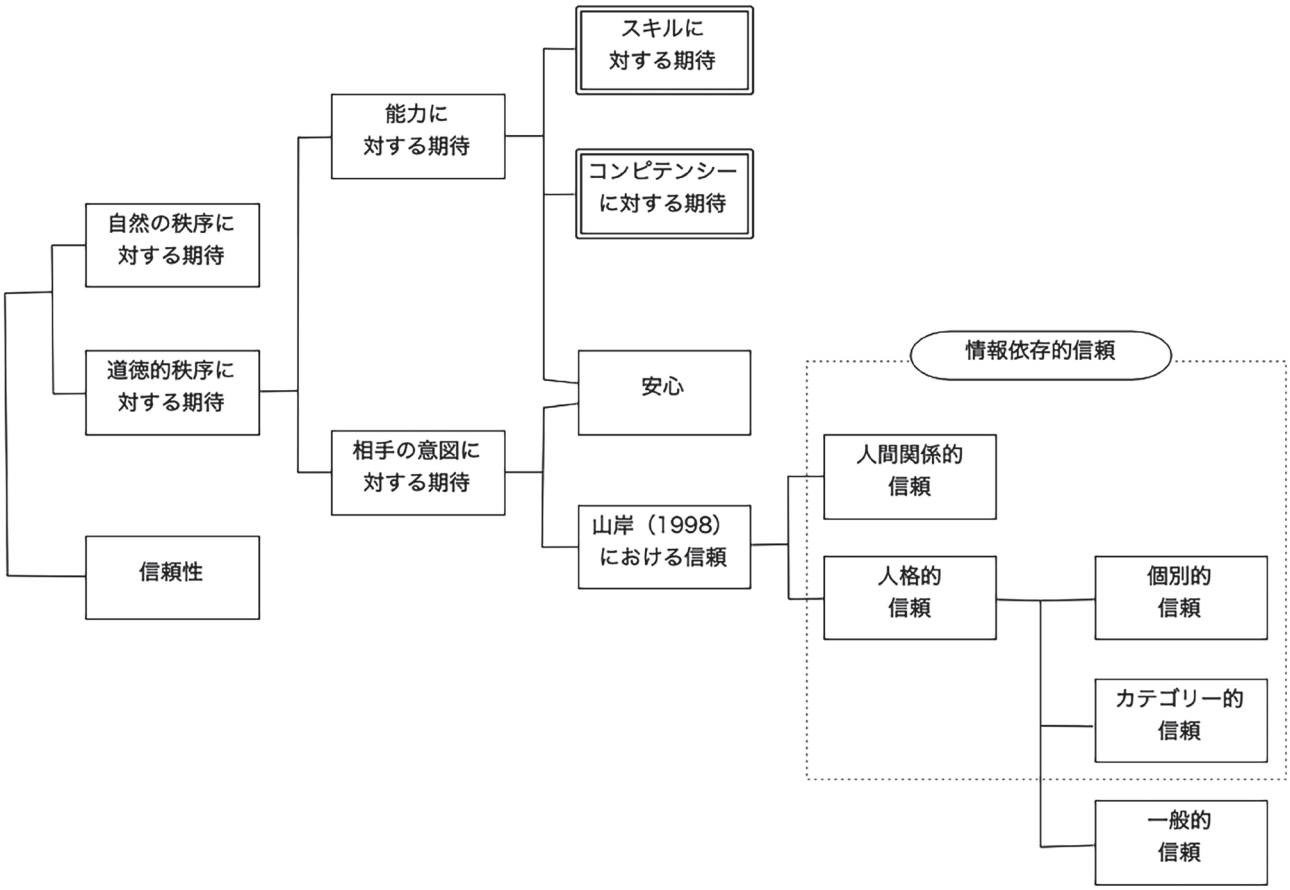

図１　信頼に関する概念整理（山岸，1998 を改変）

以下、図について説明する。二重枠で示された概念が本稿で追加したものである。前章で検討した通り、生徒と教師の信頼関係における信頼においては、教師としての能力という要因が信頼感に影響を与えることが示されているため【能力に対する期待】を詳細に見る必要があると考えられる。まず､山岸（1998）は【能力に対する期待】と【相手の意図に対する期待】は異なる質のものであるとして分けているが、唯一の共通点が【安心】していられることであると述べているため【能力に対する期待】の下位概念として【安心】も含めた。

次に【能力に対する期待】を詳細に見ていくための枠組みとして Mayer & Schoorman（1995）の ABI モデルと中井（2019）が示した子どもの教師に対する信頼感の包括的仮説モデル（以下、包括的仮説モデル）を援用することとする。その理由は、ABI モデルについては、さまざまな信頼に関する研究において用いられ、エビデンスとして頑健であり、なおかつ Hiatt et al.（2023）によって、教育現場に適用されている例が

あるためであり、包括的仮説モデルについては、教師に対する生徒の信頼感の研究として複数の実証的研究に基づいて体系的に検討した上で導き出されたモデルであり、モデルとしての信頼性が担保されているためである。

まず、Hiatt et al.（2023）がABIモデルにおける能力Abilityに関してスキルとコンピテンシーについて言及していることから【能力に対する期待】の下位概念として【スキルに対する期待】と【コンピテンシーに対する期待】を配置した。この【スキルに対する期待】には教科指導や教育相談における技術が含まれ、【コンピテンシーに対する期待】には明朗性や正当性などの教師として効果的な行動を行う際の背景となる特性が含まれる。また、ABIモデルにおける他者への配慮Benevolenceと誠実性Integrityは【相手の意図に対する信頼】に含まれる【人格的信頼】の下位概念である【個別的信頼】に包含されると考えられる。

次に、図1に示された概念のうち【山岸（1998）における信頼】の下位概念として配置されている各概念について、中井（2019）の包括的仮説モデルに基づき、検討を加える。まず【人間関係的信頼】とは、山岸（1998）によると「他の人間に対してはともかく、自分に対しては信頼に値する行動をとる傾向をもつ人間であるという期待」とされており、包括的仮説モデルのうち「個々の教師の要因」が該当すると考えられる。また【人格的信頼】は「相手が誰に対しても信頼に値する行動をとる傾向をもつ人間であるという期待」とされており、その下位概念の「特定の個人についての情報にもとづく」【個別的信頼】も含め、「個々の教師の要因」が該当すると考えられる。

同じく【人格的信頼】の下位概念である【カテゴリー的信頼】「特定のカテゴリーに属する人間についての情報（あるいは偏見やステレオタイプ）にもとづく」とされ、【一般的信頼】は「他者一般、あるいは人間一般についての情報や知識、信念にもとづく」とされており、これらは、ABIモデルや包括的仮説モデルが扱わない、Erikson（1959/1979）の基本的信頼感や天貝（1995）の信頼感尺度で測定しようとする信頼感のような、いわゆる他者一般に対する信頼感（とその一部）が該当すると考えられる。

２－２　教師から生徒に向けられる信頼感

ここまでの議論においては、主として生徒から教師に向けられる信頼感について見てきたが、先述したように、本稿のテーマである信頼関係は、信頼感を生徒と教師がお互いに持ち、あるいは向け合っている状態を示すものであるとしたことから、教師から生徒に向けられる信頼感についても見ていくことが必要であろう。しかしながら、教師から生徒に向けられる信頼感に関する研究は、これまでほとんどなされていないのが現状である。これは、教師が生徒を信頼することは当たり前のこととされ、取り沙汰されることがないことが影響しているものと考えられる。

一方で、昨今の教育現場では、不登校、いじめの重大事態、暴力行為など、課題が複雑化・困難化している状況がある（文部科学省中央教育審議会，2024）。特に、特別の教育支援を必要とする児童生徒の数も急増しており、発達に課題のある児童との信頼関係の構築・維持の困難を指摘し、そのために必要な教師行動について検討した研究も出てきている（渡邉・服部・鈴木，2022）。また、新元・蘭・越（2021）は、学級崩壊により対応困難となった教室を対象として、相互承認という視点からエピソードを質的に検討しており、信頼という概念は用いられていないものの、教師が生徒を承認するという方向性を軸にした議論は検討に値するものと考えられる。

さらに、このような特別なニーズを持っている児童生徒のみならず、通常の教科教育や教育相談のかかわりにおいて、教師側が生徒に対して抱く信頼感について検討することは、生徒の積極的学習（さらには教師自身の研究への志向）を促すために重要な姿勢である「研究者としての生徒Student As Researcher: SAR」（影山，2022）を推進するためにも、重要な視点であり、人間関係において前提とされる相互性について理解することに繋がり、生徒と教師の関係に関する本質的な議論となり得るのではないだろうか。

２－３　信頼関係は必要か？

もう一点、生徒と教師の信頼関係について検討する際に検討すべき視点を述べておこう。つまり、生徒と教師の間に本当に信頼関係が必要であるか？ということである。前節において、教師が生徒に対して信頼感を抱くことが当たり前のものとして捉えられていることについて、疑問を呈した。本稿の最初にも、生徒と教師との間に生じる信頼関係は、教科教育、教育相談など教育現場におけるあらゆる場面において重要な要因であることは論を俟たない、と述べている。しかし、そもそも生徒と教師との間に信頼関係が必要である

か、という点について、改めて問う必要もあるだろう。

かなりラディカルな考え方ではあるが、佐々木（2023）は教育現場においてICTの利活用が広まっている状況の中で、生徒と教師の関係性は変容し得るという視点から、人間である教師が唯一絶対の教育者ではなく、数ある教育リソースの中の一つとして相対化される可能性を示唆しており、信頼関係の必要性に疑問が投げかけられていると捉えることができる。また、Platz（2021）は、教育哲学の視点から、生徒が教師の教育内容や指導を受け入れるのは、関係を土台とした信頼 trustではなく、直接的交流や他者との交流の観察で得られる単なる信用 relianceによるものではないか、と生徒と教師の信頼関係の必要性に問いを建てている。

ただし、両論文とも結論としては、生徒と教師の関係は重要であるとしている。佐々木（2023）は、生徒と教師の関係性が変化することは高い蓋然性を持って言えることとしながら、そのことが教育者、教授者との役割を再考するきっかけになるとし、改めて「教育とは何か？」について考えることが求められていると述べている。また、Platz（2021）も、そもそも生徒が教師を信用するためには、教師によるフィードバック等によって、生徒自身が自身の認識が妥当性を持っていることを知ることが必要であり、そのために信頼関係が重要であると論じている。

以上のように、総論として教育現場において生徒と教師の信頼関係が重要であることは間違いはないものの、この概念について検討することが、教育とは何か、教えるとは何か、という問いを生み出すような根源的なテーマであることは、特筆すべきことであろう。

おわりに

本稿では、教育現場における生徒と教師の信頼関係について、先行研究を整理することにより、その性質について論じてきた。まず、生徒と教師の信頼関係の概念について論じる前提として、信頼、信頼感、信頼関係という語について整理し、その多義性について示した上で、それぞれを操作的に定義することを行なった。続いて、生徒が教師に対して信頼感を生起する際の教師の行動についての先行研究を列挙し、生徒の信頼感を生起させるための教師の行動には、①児童生徒に対する受容と尊重、②教師としての能力、③正当性、④親密性が重要であることを示した。さらに、生徒の教師に対する信頼感に関する先行研究を列挙し、このテーマに関する研究において、「定義」の水準、「行為者」の水準、「対象」の水準などを明示した上で研究を進める必要であることを示した。そして、このテーマに関する研究を進める上で参考になる視点として、山岸（1998）の信頼の概念整理をベースに生徒と教師の信頼について考察し、教師が生徒を信頼することに着目する必要性を論じ、最後に生徒と教師の信頼関係の必要性を改めて問うことが教育行為の意味を問い直すことになる可能性について提案した。

最後に、本稿の今後の課題について述べる。本稿では、生徒と教師の信頼関係についての先行研究を概観したが、先行研究の対象としているテーマの関係で、信頼感の検討に留まっており、信頼関係の検討にまでは至っていないことが挙げられる。このことは佐竹（2003）や中井（2012）も課題として挙げており、関係について実証的に検討するための方法論を工夫必要がある。

また、本稿では生徒に信頼感を生起させる教師の行動や信頼感の構造について論じたが、実際の教育現場において生徒との信頼関係を深めるような具体的アプローチについては言及できていない。実証的研究を実践に活かしていくためにも、例えば、生徒と教師の信頼関係を構築・維持していくためプログラムの開発や、その効果を検討するような研究が求められる。

引用文献

天貝由美子(1995). 高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響. 教育心理学研究, 43, 364-371.

Erikson, E. H. (1957). Identity and the life cycle. New York: International Universities Press. 小此木啓吾（訳）(1973). 自我同一性. 誠信書房.

羽賀正太郎・三浦公裕(2023). 回想法を活用した信頼できる教師の特徴について――信頼できる教師尺度を用いて. 北方圏学術情報センター年報, 14, 59-63.

Hiatt, M. S., Lawman, G. H., Maloni, M. & Swaim, J. (2023). Ability, benevolence, and integrity:

The strong link between student trust in their professors and satisfaction. The International Journal of Management Education, 21(2), 1-12. https://doi.org/10.1016/j.ijme.2023.100768
廣澤守(2002). 小学校における教師と児童との信頼関係に及ぼす「かかわり」の影響――児童が担任教師を信頼する理由の構造について. 第44回日本教育心理学会発表論文集, p. 324.
影山奈々美(2022). Michael Fieldingの「ラディカルな同僚性」概念の成立――教師と生徒の関係性に着目した考察. 教育学研究, 89(3), 39-50.
岸田元美(1987). 教師と子どもの人間関係――教育実践の基盤. 教育開発研究所.
児玉真樹子・川本竜太郎(2015). 教師の行動と児童の教師に対する信頼感との関係――発達段階に着目して. 学習開発学研究, 8, 81-88.
Mayer, J. H. & Schoorman, F. D. (1995). An Integrative Model of Organizational Trust. The Academy of Management Review, 20(3), 709-734.
文部科学省中央教育審議会(2024).「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策について――全ての子供たちへのよりよい教育の実現を目指した、学びの専門職としての「働きやすさ」と「働きがい」の両立に向けて（答申). https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00006.htm (2024年10月21日閲覧)
森敦史(2016). 小中学生の教師に対する信頼感とその規定要因――小中学生の比較を通じて. 志學館大学大学院心理臨床学研究科紀要, 10, 43-52.
村上達也・坂口奈央・櫻井茂男(2012). 小学生の「担任教師に対する信頼感」尺度の作成. 筑波大学心理学研究, 43, 63-69.
中井大介・庄司一子(2006). 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因. 教育心理学研究, 54(4), 453-463.
中井大介(2012). 生徒の教師に対する信頼感に関する研究. 風間書房.
中井大介(2019). 教師と子どもの信頼関係と心理教育的援助サービス. 日本学校心理士会年報, 11, 1-12.
新元朗彦・蘭千壽・越良子(2021). 担任教師の学級崩壊克服に向けた変容プロセスの検討――教師と生徒が承認し合う関係の構築を通して. 上越教育大学研究紀要, 41(1), 57-67.
緒方宏明・鈴木康平(1997). 教師と児童・生徒の信頼関係――教師の指導性が信頼関係や公式・非公式的リーダー, 非公式的集団の特性に及ぼす影響. 熊本音楽短期大学紀要, 21, 29-44.
Platz, M. (2021). Trust Between Teacher and Student in Academic Education at School. Journal of Philosophy of Education, 55(2), 1-10. https://doi.org/10.1111/1467-9752.12560
佐々木英和(2023). ICT利活用時における「教育者－学習者」関係――「教育メディアとしての教師」という発想が実践的に要請される理論的意味. 宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要, 10, 3-10.
佐竹圭介(2003). 教育現場における教師に対する生徒に信頼感の研究. 九州大学心理学研究, 4, 195-201.
渡邉賢二・服部直美・鈴木優里(2022). 発達に課題のある児童との信頼関係を構築・維持するための教師行動――小学校教師を対象として. 皇學館大学紀要, 60, 76-60.
山岸俊男(1998). 信頼の構造――こころと社会の進化ゲーム. 東京大学出版会.